



特集

## ふるさと三原への思い

体操五輪メダリスト・名誉市民

# 池田敬子

1933(昭和8)年、佐木島生まれ、86歳(旧姓は田中)。三原高校で体操と出会い、日本体育大学に女子1期生として入学。1954(昭和29)年のローマ世界選手権平均台の金メダルをはじめ、五輪・世界選手権で合計8個のメダルを獲得。日本女子初の国際体操殿堂入りを果たす。日本体育大学副学長、日本体操協会副会長、全日本ジュニア体操クラブ連盟会長などを歴任し、現在はジャンピング体操スクール校長、日本体育大学名誉教授。2003(平成15)年に三原市名誉市民とされる。



写真提供 朝日新聞社

# Keiko Ikeda

1964(昭和39)年東京オリンピック。渋谷区千駄ヶ谷の東京体育館に集まった観衆の注目が、平均台の上で舞う1人の選手に集まりました。力強く美しい演技を披露するのは日本女子体操のエース・池田敬子さん。着地が決まった瞬間に、割れんばかりの拍手と歓声が会場を包みました。

この大会で日本女子体操は団体3位に輝き、オリンピックで初めてのメダルを獲得。池田敬子さんははじめとする選手たちの活躍は多くの人を感動させ、勇気付けました。

三原高校で体操を始めて、わずか5年後のローマ世界選手権で、平均台金メダルを獲得するなど、数々の偉業を成し遂げてきた池田敬子さん。選手として、そして指導者として活躍する中で、ふるさと三原のことも大切にされてきました。

日本女子体操界の先駆者であり、三原市名誉市民である池田敬子さんに、これまでの体操人生や、ふるさと三原への思いなどをお聞きしました。

聞 広報戦略課

☎0848・67・6007



◀池田敬子さんが大切にしている言葉「力の美」。力を美しく表現するという意味が込められています(池田さん直筆)



# ふるさと三原への思い

## 特集 体操五輪メダリスト・名誉市民 池田敬子



### 佐木島での遊びが 体操選手としての基礎に

私は佐木島で製塩業を営む田中家の長女として生まれました。好奇心が旺盛で、大きな松の木に登ったり、海で泳いだり、いろんな遊びに挑戦しました。島全体が私の遊び場だったのです。

好きな事をやらせてくれる家でした。私が高跳びをしたいと言っていると、父が竹でバーとスタンドを作ってくれました。兄と一緒に遊んでいるうちに正面跳びを覚え、それが良かったのでしょ、その後、県の中学生の記録を更新することができました。

島から三原まで男の子3人と船をこいで渡ったこともありました。さすがに帰ってくる時はしんどかったですね。ただ、負けん気が強かった私は、弱音を吐く男の子を「海に落とすよ」と鼓舞しながら帰りました。

とにかく興味があることは何でもやりました。普通だったら「本当にこれをやっても良いかな」と考えるとと思いますが、そうじゃない、すぐにやるのです。島での遊びが、体操選手としての基礎を作ったのだと思います。だからこそ、今の子どもたちに

もいろんな遊びを経験してもらいたいですね。

### 体操と出合った高校時代

中学卒業後、三原高校に進学した私はテニス部に入学しました。ところがボール拾いばかりで、なかなかテニスをさせてもらえません。やきもきする中、たまたま目に入ったのが校庭の隅にあった鉄棒。スカートを挟んで蹴上がり、大車輪をしていたら、体操部顧問の中島リキ子先生が飛んで来ました。鉄棒は校長室の前にあり、私の様子を見た校長先生が「女性があんなことをして」と中島先生に連絡を入れたのです。

私を見て驚いた先生は「器械体操をやってみないか」と言いました。私は体操について何も知らなかったで「ラジオ体操」のことかなと思いました。そのまま体育館に連れて行かれると、そこではつり輪や平行棒、平均台の練習が行われていたのです。見た瞬間に「これだ」と思いましたね。すぐに体操部に入部し、それからというもの体操に熱中しました。

平均台は当時、幅が8センチしかありませんでした。落ちな



▶大学時代、帰省中に恩師 中島リキ子さん(左)と食事を楽しむ 池田敬子さん(右)

いように恐る恐る競技する上級生たちを横目に、私は走ったり、跳んだり。船の縁を歩いて遊んでいた私にとって、平均台の上での競技は全く怖いものではありませんでした。周りの人から「サーカスをやっていたの」と聞かれたこともありましたが。

体操を始めて4カ月後、私は広島県大会で優勝。その年に神奈川県で行われた国体では跳馬で6位になりました。広島県初の快挙ということで、新聞にも載りました。「広島にすごい選手

端まで大きくジャンプし、ターンを決めました。他の選手たちは驚いていたと思います。当時平均台の上でジャンプする選手はいませんでしたからね。私がジャンプできたのは、練習中に男子と遊びで、どこまで跳べるかを競っていたからなのです。

この種目で私は金メダルを獲得しましたが、正直なところ「こんなもんか」という感じで、実感はあまり湧きませんでした。表彰台の上でも「早く帰国してみそ汁が飲みたいな」と考えていたくらいです。

らしいです。

このような調子でしたので帰国した時は驚きました。マスコミの取材がとにかくすごかったです。佐木島に帰った時には、島民の皆さんが総出で祝ってくれました。「こんなにもみんなが喜んでくれるものなんだ」と不思議に思いましたね。祖母から「みんながこんなに祝ってくれているのだから、しっかりもてなさない」と言われたのを覚えています。みんなに喜んでもらうのが好きな家だったのです。

が「いる」というわさは東京まで広まり、その後、オリンピック強化選手としてナショナルチームの一員となりました。

### 女子の1期生として 日体大に入学

高校を卒業後、日本体育大学に女子の1期生として入学しました。体操部員はそのうちたった2人。ですから練習は男子と一緒にでした。それが良かったのだと思います。一緒に練習をすることで、男子並みの技を身に付けることができました。

練習は体育館ではなく屋外で行うことがほとんどでした。雨が降った時に平均台がぬれないよう「むしろ」をかぶせるのが下級生の役目。万が一にもぬれてしまったら上級生に怒られるので、心配で夜も眠れませんでした。マットもないので、土を掘ってやわらかくしてクッション代わりにしたり、雪が降ったときには、鉄棒の下に雪を集めたりして練習しました。

その時はそれが当たり前だと思っていました。特に不自由だとは思いませんでした。毎日夜遅くまで練習に打ち込み、大学2年生の時、全日本選手権で

### 初めての世界選手権

全日本で初優勝した翌年、ローマで開催された世界選手権に出場しました。私にとっても日本女子体操界にとっても初の海外遠征でした。

女子は私を含めて2人だけ、監督やコーチもいません。ですからコーチや審判の会議にも自分たちが出席しなければいけません。会議で拳手を求められる場面が何度かあったのですが、言葉が全く分からず通訳もいなかった私たちは、アメリカをまねて手を挙げました。すると突然、怒られたのです。「次の大会の候補地に立候補する国」という問い掛けに、手を挙げてしまっていました。今となっては良い思い出ですね。

### 平均台で金メダルを獲得

ローマ大会の会場は屋外でした。普段から体育館の中での練習に慣れていたのでローマの選手たちは苦戦していましたが、いつも屋外で練習していた私には全く影響はありませんでした。女子の最終種目は得意の平均台。演技が始まると私は端から



▶ローマ世界選手権の帰国後、鷺浦中学校で開かれた歓迎会で美技を披露する池田敬子さん



# ふるさと三原への思い

## 体操五輪メダリスト・名誉市民 池田敬子



▲東京五輪の平均台の上で高くジャンプする池田敬子さん  
写真提供 共同通信社

### 戦後を実感した メルボルン五輪

初めてオリンピックに出場したのは、1956(昭和31)年のメルボルン大会。私にとって戦後を感じた大会でした。

開会式での入場行進の時、1人のおばあさんが私たちの前に飛び出てきて「ジャップ。私の子どもを返せ」と叫んだのです。後から聞くと息子が捕虜として日本に捕まり、殺されたということでした。

それとは反対の経験もしまし

た。地元の人が女子チームを家に招待してくれたのです。私たちはその人が一生懸命作ってくれたおにぎりをごちそうになりました。その人は元捕虜で、「日本人にとっても優しくしてもらった」と話してくれました。戦争や平和について改めて考えさせられましたね。

競技では、床で4位、団体で6位入賞という結果でした。初めてのオリンピックで入賞。日本女子体操は世界の中でも十分戦える」と手応えを感じた大会でもありました。

### 東京五輪への道

東京五輪の前年、次男を出産しました。妊娠が分かった時、体操協会の幹部からは「子どもを産むとは何事か」とひどく反対されました。子どもは天からの授かりものですよ、私はすごく腹が立ちましたね。「出産して、メダルも取ればいいんですよ」と言い返しました。

出産1週間後には練習を再開。長男と次男を連れて合宿にも参加しました。周りの人からは「ママさん選手なんてすごいですね」とよく言われたけどそうではない、お母さんだから強いのです。大会まではとにかく練習に打ち込みましたね。五輪まで残り1カ月の時に、右ふくらはぎひふく筋を断裂するけがを負って



▲東京五輪で長男・啓彦さんと次男・孝彦さんを連れて男子体操の応援に来た池田敬子さん  
写真提供 毎日新聞社

しまいました。少しの時間でも惜しい私は、1週間後には練習を再開しました。

### 東京五輪で悲願の メダルを獲得

女子体操の団体はソ連とチェコスロバキアの2強が抜けていました。日本は規定演技が終わった時点でドイツに次ぐ4位。メダルを獲得するには、次の自由演技でドイツを上回らなくてはなりません。

しかし私に焦りはありませんでした。絶対に勝ると信じていたからです。チームメイトに「自由演技を頑張ればいいんだから、普通にやろうよ普通に」と声を掛け、盛り上げました。自由演技の平均台が勝負の分かれ道となりました。チーム



▲体操スクールで生徒にアドバイスする池田敬子さん



▲白竜ドーム(大和町和木)で開催した健康体操教室で見本を示す池田敬子さん

企画展

広島県ゆかりの  
アスリートたち  
— 4年に1度の祭典 —

池田敬子さんを中心に、広島にゆかりがあるオリンピック選手についての資料などを展示します。

とき 7月11日(土)～8月2日(日)  
9時～17時

ところ リージョンプラザ 展示ホール

関連行事 池田敬子さん講演会

とき 7月11日(土) 13時30分～15時  
ところ リージョンプラザ 文化ホール  
岡文化課(☎0848・64・9234)

さぎしまふるさと館

池田敬子さんの母校・向田小学校の閉校舎を活用した「さぎしまふるさと館」には、佐木島の文化や歴史、池田さんに関連する資料などが展示されています。



開館日 土・日曜日、祝日 9時～17時  
ところ 旧向田小学校(鷺浦町向田野浦)

入館料 無料

岡さぎしまふるさと館(☎0848・87・5628)

メートが執念の演技を見せ、最終演技者だった私にバトンをつないでくれたのです。平均台前にして私は落ち着いていました。「自分が練習したことをきっちりやれば勝てる」という自信があったからです。大技の「片足前方宙返り」でびたりと着地を決めた瞬間、「メダルを獲れる」と確信しました。その時に応援団が持つ大きなしゃもじが見えたのです。故郷・広島を感じましたね。得点盤にはチーム最高点の9.70が表示されました。東京五輪で女子チームが銅メダル、男子は金メダル。男女共に表彰台に上がることができました。そのことが本当に良かったです。

ジュニア世代の育成に力を

ジュニア世代を育成しないといけないと感じたのは、1966(昭和41)年のドルトムント世界選手権の時でした。この大会で個人総合3位だった私は、表彰式で2位のナタリア・クチンスカヤ(ソ連)と握手をしました。私は当時32歳、彼女は17歳でした。あどけない柔らかな手を握った時に、「日本もジュニアを育成しなければ」という思いが芽生えましたね。それから小さいながらも体操教室を立ち上げました。当時はジュニア育成について周りから理解されませんでした。私は奔走し、後に五輪に出場した岡崎聡子などを輩出することができました。

きました。

私はいろんな人に応援してもらいました。その人たちへの恩返し、自分の経験を後輩たちに伝えること、そして指導者を育てていくことだと思っています。現在も広島や東京でジャンピング体操スクールの経営し、ジュニアをはじめたぐさんの世代の人たちに体操を教えています。

ふるさと三原への思い

現在私は東京に住んでいます。三原にはたびたび帰ってきています。市の依頼を受けて健康体操教室の講師なども務めました。受講した人が元気になって帰ってくれるのはうれしいですね。お年寄りが元気になると、

子どもたちにも良い影響を与えたいと思います。

三原に帰ってきたときの楽しみの一つが、なじみの魚屋さんで食べるアナゴ。私を見ると「敬子ちゃんが来た」と七輪で焼いて、出してくれるのです。匂いに誘われて集まった人たちに「あなたたちも食べなさい」と声を掛けて、にぎやかに過ごすのです。私にとって三原は本当に楽しい場所ですね。だからこそもっと元気なまちにしたいという思いを強く持っています。

以前、三原を宣伝したいという思いから、県内の体操大会でやっさ踊りを踊ってもらったことがありました。しかし会場には三原のこともやっさのことも

知らない人がいたので。とても寂しい気持ちになりました。

やっさをはじめ、この町にはたくさんのお金があります。自分たちだけのものにするのではなく、外にPRしていくことが大切だと思います。市はもちろん市民の皆さんと一緒に意見を出し合い、よそにはない「三原ならでは」を打ち出すことで、人が集まる元気な町になるのではないのでしょうか。三原の元気のために私もできる限りのことをしたいと思っています。

参考文献「人生、逆立ち・宙返り」池田敬子/著  
協力 ジャンピング体操スクール、さぎしまふるさと館